

令和3年度 自己評価表 (最終評価様式)

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>これからの社会の中でたくましく生きるための学力や豊かな人間性を育み、地域社会の発展に貢献できる人材の育成を図る。</p>	<p>今年度の重点目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主体的な学びの推進 規範意識と多様性の受容力の向上 地域貢献力の育成
---------------------------	---	-----------------	--

年度当初				評価結果(1月)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 学びの質的改善	学びに向かう意欲・意識の醸成	<ul style="list-style-type: none"> 「学びのルール」を順守している生徒は、アンケート結果では93.2%となっており、目標に充分達していると思われる。 12月末日現在、授業関係で指導改善カードを受けた生徒は2人であった(R1:4名)。 家庭学習調査の結果を受けて面談をし、振り返を行った。また授業への取り組み姿勢に関するアンケートでは、1年次生100%、2年次生95.4%、3年次生88.4%が肯定的な回答をした。 本校の進路指導に肯定的な回答をした生徒は80.5%(R1:76.1%) 日野高版の「ふるさとキャリア・サポート」を作成し、進路用ファイルを用いたポートフォリオの蓄積を始めた。 タブレットを授業で活用している教員は45%。臨時休業時、オンラインによるSIR授業を行ったが、ほぼすべての担当教員は対応出来た。また、ICT職員研修を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学びのルール」を順守している生徒が90%以上。 授業関係で指導改善カードを受けた生徒が延べ5人以下。 生徒の家庭学習実施を把握し、学習指導の改善を話し、自らの授業への取り組み姿勢に肯定的な回答をする生徒が90%以上。 本校の進路指導に肯定的な回答をする生徒が80%以上。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学びのルール」からも毎月の重点目標を設定し、意識付け及び定着を図る。 年度当初に職員研修を実施し、教職員に指導改善カードのルールの周知徹底を図るとともに、職員間で統一感のある指導改善カードの運用に努める。 授業の工夫や課題の課題、家庭学習調査の結果を担任面談で振り返ること等を行い、家庭学習の習慣化を促す指導を行う。 進路ガイダンスや面談等、キャリアカウンセリングの充実を図る。 「ふるさとキャリア・サポート」を活用し、キャリア教育の学びをポートフォリオとして蓄積させる。 「課題研究」におけるルーブリック評価を取り入れつつ、生徒の自己有用感と客観的な視点の育成を図る。 授業におけるICT活用事例の職員研修を行い、質的改善を促進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学びのルール」を順守している生徒は、アンケート結果では92.5%となっており、目標に達していると思われる。 12月末日現在、授業関係(授業放棄・授業怠り)で指導改善カードを受けた生徒は8名、のべ16件(全て1年次生)であった(R2:2名)。 生徒の授業での取り組み姿勢に関するアンケートでは、91.5%が肯定的な回答をした一方、学ぶ内容や進め方に満足しない生徒の割合が例年と比較して14ポイント増えた。特に増加した1年次生を対象に、さらに掘り下げた内容のアンケートを行い、それを元に授業改善のための教職員研修を行った。 日野高版の「ふるさとキャリア・サポート」を作成し、進路用ファイルを用いたポートフォリオの蓄積を行い、キャリアガイダンス等で活用した。 「課題研究」におけるルーブリック評価を継続的に実施しており、自己有用感や客観的な視点が育成されつつある。(1人の役に立っていると思う(A+B)12年次44.8%→3年次57.1%) OGGAスクール推進室より講師を招き、ICT教職員研修を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 「学びのルール」について、HR等で継続的、日常的に意識付けをし、更なる定着を図る。 指導改善カードの積極的な運用と不適切な生徒の言動等に対するその場での指導を全職員一丸となって行う。 家庭学習の習慣化を促す方策を検討する。また、更なる授業改善を図り生徒の授業に対する満足度を上げていく。 進路HR等で入試制度の周知やオープンキャンパスの案内など進路意識の高揚を目指す場を増やす。 課題研究の成果を校内外で発表する機会を通し、自己の成長を認識させる機会を作る。 ICT教職員研修は、継続的に行う。
	協同学習の実践	<ul style="list-style-type: none"> 授業の質的改善に取り組んでいると回答する教員が85.3%(R1:83.9%)。 公開授業は各教科代表1名として11月に実施。 「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」で協同的な学びの時間を多く設定している。 	<ul style="list-style-type: none"> 協同学習注力授業科目の決定と、授業プランシートを活用した授業公開を継続して行い、取り組みを日常化し、教員間の協同学習の視点の共有化と授業改善に係る意欲の向上を図る。 公開授業を含めて、他の教員の授業を年2回以上参観し、振り返シートでフィードバックする。 「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」の授業をはじめ、学習活動全体を通して、生徒が協同して学ぶことができるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 協同学習注力授業科目の決定と、授業プランシートを活用した授業公開を継続して行い、取り組みを日常化し、教員間の協同学習の視点の共有化と授業改善に係る意欲の向上を図る。 公開授業週間での参観シート活用を促進し、授業のさらなる質的改善へつなげる。 「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」の授業において話し合いや振り返の時間を確保し主体的な学びを促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の質的改善に取り組んでいると答えた教員は、91.7%で、前年の88.9%よりも向上した。 公開授業週間では、7月にオンラインで授業研究会を実施。11月には各教科で公開授業を行った。 「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」で協同的な学びの時間を多く設定し、コミュニケーション能力が向上した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 公開授業の積極的な参観をさらに呼びかける。
2 社会の中で生き抜く力の育成	人と関わる力の伸長	<ul style="list-style-type: none"> 「他者理解において成長を実感できた」と回答する生徒は86.7%(R1:81.5%)。 総合的な学習の時間やLHR活動とおして、他者と協同・協調する姿勢が見られるようになった。 LINEによるダブル1件8名指導、行き過ぎた行為による指導1件1名指導の2件であった。 各学期、学年目標や自己目標設定に係る学年集会を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 「他者理解において成長を実感できた」と回答する生徒が85%以上。 日々の授業や活動を通して、自らの思いや考えを伝えると同時に相手の思いや考えにも耳を傾けて互いに認め合いながらコミュニケーションがとれるようになる。 他者を傷付ける、いじめ、SNSへの書き込み、行き過ぎた行為により指導を受けた指導件数が延べ5件以下。 定期的、もしくは必要に応じて学年集会を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解-他者理解講演会、性教育講演会を実施する。 授業や特別活動、その他学校生活全般に於いて他者との関わり方を意識出来るような場を捉えてコミュニケーション能力の育成を図る。 教職員全体でいじめは絶対に許さないという体制の指導を行うとともに、いじめアンケートやこころのメッセージ等を利用し、生徒の様子を把握し、いじめの早期発見や組織的かつ迅速な対応を行う。 学期ごとに目標設定と振り返りの時間を設けることで、自己の成長を客観視させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年次生対象に自己理解-他者理解講演会、2年次生対象に性教育講演会を実施した。(12月) 日々の授業や学校行事などに於いて生徒間の活動を充実させることができるように、事前に教員間で検討や打合せを行い、生徒のコミュニケーション能力の育成につなげる取り組みがなされた。 12月末日現在、いじめ、SNS関連のトラブルなどの事案で指導件数が3件(のべ3名指導)であった。(R2:2件) 学期ごとに目標設定と振り返り、行事ごとに振り返りを行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解や他者理解を深める取組を継続する。 共に学ぶクラスメイトが落ちこみで集中して学習に取り組める、楽しく学校行事に参加できる環境や雰囲気づくりの必要性、そのためクラスメイトどう関わり合っていくのかなどについて、引き続き機会を捉えて生徒の気づきを促し行動につなげる。 引き続きいじめアンケート、心のもようメッセージを実施や日頃の声かけを行い、いじめや人間関係トラブル、生徒の悩みや不安の早期発見に努め、学校と保護者との密な連携を努め、迅速な対応を行う。 行事ごとに振り返りを行うようにし、自己目標を意識する機会を設ける。
	感情・行動をコントロールする力の増大	<ul style="list-style-type: none"> 自尊感情や自己有用感に関するアンケート項目に、肯定的な回答をする生徒は40.9%(R1:50.5%)。 ストレスマネジメントを1年次生は6月、2・3年次生は9月に実施した。 12月末日現在、暴力行為、暴言、器物破損等の指導件数は0である(R1:4件)。 生徒の学校満足度に関する肯定的な回答は82.2%(R1:85.3%)。 朝食を全く摂らない生徒が9%(R1:7%)であり、1年次生対象に食育講演会、希望者対象に簡単朝食講習会、3年次生対象に食育映画鑑賞会を実施した。また、保健室前掲示や保健室で啓発活動、保健室で対象生徒への個別指導を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 自尊感情や自己有用感に関するアンケート項目に、肯定的な回答をする生徒が55%以上。 暴力行為、暴言、器物破損等の指導件数が3件以下。 生徒の学校満足度及び自己肯定感に関する肯定的な回答が85%以上。 朝食を全く摂らない生徒が5%未満。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年ごとにストレスマネジメント授業を実施する。 地域貢献を目的とした生徒の活動を通じ、生徒自身に成功体験を積み、自己肯定感を高める。 授業や学校等で生徒が安心して生活できる環境をつくり、生徒の良さを引き出し、自己肯定感を高めることができるような取り組みを行う。 食育講演会、食育映画鑑賞会を実施する。 「食事」についてのアンケートを実施し、結果を周知し、啓発を行う。対象生徒への個別指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自尊感情や自己有用感に関するアンケート項目に、肯定的な回答をした生徒は46.1%(R3年12月)。 12月末日現在、暴力行為、暴言、器物破損等の指導件数は15件(のべ4名指導)である(R2:0件)。 対人関係でストレスを持つ生徒や自己肯定感の低い生徒も多い。 1年次生対象に食育講演会、3年次生対象に食育映画鑑賞会、希望者対象に簡単朝食講習会(家庭クラブ)を実施した。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ストレスマネジメント授業を継続する。またHyper-QUアンケートの結果を活用する。 地域貢献を目的とした生徒の活動を積極的に報道等提供し、生徒の自尊感情や達成感、自己有用感をさらに醸成する。 一人一人の良さを認め伸ばしてあげるような声かけや支援をしていく。 食育講演会、食育映画鑑賞会などの啓発活動、保健室での個別指導を継続する。
3 地域と連携した教育の推進	地域に貢献する意欲の醸成	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルスの影響で活動が制限されたため、「地域と連携した学び」が充実している」と肯定的に回答した生徒が91.8%と高評価が継続している。 2年次「総合的な学習の時間」で地域課題を探る取り組みができた。 「学びの成果発表会」では、地域を学びのフィールドとした取り組みが学年進行することによって充実していると高評価を得た。 生徒会執行部を中心に、学校祭の企画運営に積極的に関わり姿勢がみられる。 環境教育LHRを実施し、ごみの分別方法、ごみ減量などの取り組みについて周知した。 ごみ減量チャレンジでは各学期末に発表を行い、ごみ出さないDAYを11月に実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 「地域と連携した学び」が充実している」と肯定的に回答する生徒が90%以上。 地域の人材・資源を活用した授業等を実施し、生徒が地域を知り、地域に対して自分ができることを考えるようになる。 生徒がボランティア、生徒会活動、学校行事等で、地域貢献を提案できるようになる。 前年比可燃ゴミの総量を5%減じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」において、地域資源や地域の人材を活かした学習を今後継続して実施し、地域の教育拠点として地域貢献力の育成を引き続き図っていく。 生徒会を中心に生徒自身が主体的に活動を行い、その活動の中から実現可能な地域貢献を提案させる。 ごみ出さないDay等の減量意識啓発活動を通じて、減量を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルスの影響で活動が制限されたため、「地域と連携した学び」が充実している」と肯定的に回答した生徒が77.5%(R2:91.8%)と下降した。 「学びの成果発表会」では、地域を学びのフィールドとした取り組みが学年進行することによって充実していると高評価を得た。 生徒会執行部を中心に、学校祭の企画運営やほかのひまわりの活動、生徒アンケートによる現状把握への取り組み等、積極的に関わり姿勢がみられた。 ごみ減量チャレンジを年間を通じて行い、学期末に発表を実施した。 ごみ出さないDAYを5月に実施した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 1年次の「産業社会と人間」から3年次の「課題研究」までの学習の流れを精査し、3年間を見通して卒業までに生徒につけた力をどのようについでいかにカリキュラムを再構築する。 地域の学びを意識させるため、2・3年次の「総合的な学習の時間」の呼称を「日野探究I」「日野探究II」(仮称)と改める。 地域の資源及び人材等の活用をさらに積極的にを行い、地域との連携を強化し、地域貢献力の育成の充実をより一層図る。 ごみ減量の取組を継続する。 ITBAS通信等で啓発活動を継続する。
	勤務時間管理及び働き方改革	<ul style="list-style-type: none"> 勤務時間及び職員定数に対して、生徒指導やオンライン授業準備などの感染症対応等のため業務量が過大傾向になっており、時間外業務が発生している。 6月職員会議の不開催。 「帰らぬDAY」・「リフレッシュ」の設定日の定例化と同日のノー会議デーの設定。 8月対外業務停止日の設定。 体験的学習活動等休業日を11月に設定。 勤務時間の合理化や変形勤務制度等の運用。 進路に関わる書類及び書類送付手続の見直しを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間外業務のさらなる縮減による長時間労働の解消や多様な働き方への対応を図る。 業務改善に取り組むことにより、教材研究の時間や生徒の情報交換等の時間を確保し、円滑な校務運営の推進に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 諸会議を時程内に収めるとともに、時間外業務の削減を図る。 組織的な業務運営を推進し、業務の平準化を図るとともに、個々の負担を減じ、校務運営の効率化に取り組む。 前活動計画を毎月立案し、適切な前活動指導が行えるようにする。 校内諸事業、学校独自事業や高等学校標準事業等の見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 一部の会議は時程内に収まらず、超過しているものがあった。 業務の平準化を推進しているが、主任・担任業務のように特定の教職員に負担がかかる状況がある。 生徒指導、保護者対応等の業務が多く発生した。 前活動計画は毎月立案されており、超過については一定数以下である。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 適確な業務の遂行と平準化を行い、組織的な業務遂行を図り、個々の業務負担の軽減、時間外業務の削減を図る。 担任業務や分掌業務を整理し、業務の見直しを行う。 体験的学習活動等休業日を5月に設定する。

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直

(100%) (80%程度) (60%程度) (40%程度) (30%以下)